

<学界消息>歴史的ケンブリッジの, いま

YAMAZAKI, Tatsuroh / 山崎, 達朗

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

78

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

427

(終了ページ / End Page)

442

(発行年 / Year)

2011-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007133>

【学界消息】

歴史的ケンブリッジの、いま

山崎達朗

ケンブリッジ (Cambridge) は “Bridge over the Cam” (ケム川に架けられた橋) という意味であり、発音はむしろ「ケインブリッジ」に近い。ロンドンの北、80kmあたりのところに位置する12万人ほどの大学町である。現在ではイギリスのハイテク産業の中心地のひとつとなっている。

ケンブリッジ大学は13世紀初めに、町の人々と対立してオックスフォードから逃れてきた学者たちが、この地で研究や教育活動を行ったのが始まりである。町中に大学施設が点在するこの大学は800年の伝統を誇り、ニュートンやクロムウェル、ダーウィン、ラッセル、ケインズなど歴史的な社会変革に関わってきた人物を多く輩出している。

私は今回、客員研究員 (visiting scholar) として、英語学部 (Faculty of English) の中の英語・応用言語学リサーチセンター (Research Centre for English and Applied Linguistics, 略称RCEAL) に所属した。長期の留学はシカゴ大学院時代以来、久々のものであった。海外生活は合算して10年目となるが、いつも謙虚にさせられる新しい発見がある。以下私が見たケンブリッジを、今回撮影した写真とともに紹介してみたい。

◆カレッジ (Colleges)

ケンブリッジ (とオックスフォード) 大学の「カレッジ」は、一般にいうような単科大学のことではなく、いわゆる「学寮」である。すべての学

生と多くの教員が所属している。学生はそこでスーパービジョンと呼ばれる少人数形態の授業も受ける。ケンブリッジには1284年創設のピーターハウスを始め、31（オックスフォードは39）のカレッジがあり、規模もほとんどが400人～1,000人近くで、私はその半数以上に足を運んでみた。伝統的に有名な、市の中心部にあるものは人気があり、ややはずれていたりあまり知られていないカレッジは訪れる観光客もまばらである。

印象に残る数多いカレッジの中で、アイザック・ニュートンやフランシス・ベーコンが卒業したトリニティーカレッジ（Trinity College）はその大きさと壮麗さで知られる。財政的にも一番潤っているという。写真右手に見える門は1546年にヘンリー八世が建てたものである。また（手前の）芝生のあるグレートコート（Great court）は大学最大の規模で訪問者も多く、その中で複数の守衛が常に目を凝らしている。



Trinity College

私も歴史的な建造物の美しさをカメラにおさめようと次々にシャッターをきった。ところがそれを見ていた守衛が血相を変えて走り寄って来たのを覚えている。大学関係者である旨説明をしたが、聞いてみるとカレッジの窓に近寄りすぎたというのが「黒い山高帽」氏の判断である。私的なスペースに配慮するのが基本姿勢とのことだった。

正門のすぐ横にある木は、「万有引力」を発見したニュートンの林檎の木の子孫だといわれている。子孫とはいえあの歴史的な木が目の前にあるのは感激である。

中庭のネヴィルズコートには著名な建築家のクリストファー・レン卿（Sir Christopher Wren）



Newton's apple tree

が1695年に図書館を完成させている。ここには近代科学に重大な影響を与えたニュートン力学の『自然哲学の数学的諸原理』（*Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica*）が収められており、訪れる観光客が後を絶たない。



Emmanuel College

また聖アンドリュースストリートには最初のプロテスタント系のエマニュエルカレッジがある。ここはエリザベス一世時代の1584年に設立された。前述の建築家レンが1666年に設計した美しいチャペルと回廊が正面から見える。このカレッジはピューリタン思想の中心地で、アメリカの植民地化

の際重要な役目を果たした。その代表者のひとりがハーバード大学の創設者、ジョン・ハーバードである。彼は新天地に渡った翌年に結核で亡くなってしまうが、財産と蔵書をマサチューセッツ州ニュータウンの学校に寄付した。

このカレッジのチャペルは公開されているが、私が訪れた時は誰もいなかった。重いドアをゆっくり開けると、周りはまったくの静寂である。呼吸の音さえ聞こえそうである。湿気を含んだ古い壁の独特なおいが一面に広がる。ふと見上げた巨大なステンドグラスの列に、ハーバードをかたどったものが目に眩しく入ってきた。そこには31歳の若さで亡くなった彼が気高く、美しく描かれている。



John Harvard

ケンブリッジで最も有名な建築物と言えば、キングズカレッジのチャペルであろう。中世の代表的な建築のひとつであるが、ヘンリー六世が基礎を築いてから、100年以上かかき1544年に完成したとされる。かなり保存

状態がよく、第二次世界大戦中には窓ガラスが1枚1枚外され保管されるほど、大切に扱われたのだという。ばら戦争末期に即位したヘンリーチューダーがチャペルを完成させ、西側壁面にチューダー家のバラの紋章を飾り付けた。内部に足を入れると、天井の独特な扇形模様が印象的で、そこまで24mほどの高さを誇る。このチャペルで行うクリスマスキャロル礼拝式は、毎年世界に放送されているそうである。またキングズカレッジそのものは、もともとイートン校の卒業生の受け入れのために建てられその伝統は400年も続いた。

ここで撮る写真は正面からも裏からも、誰が写しても絵になる風景である。下の写真は裏から撮ったものであるが、芝生の手前にケム川があり、その手前には牛が放牧されている。この辺では家畜や野鳥の姿は特に珍しくはないが、なんとも癒される光景である。



King's College Chapel

川はこの角度では見えないので、パンティング（平底舟での川下り）で行き来する舟や客は微妙に隠れている。その代わり、立ち上がった漕ぎ手のみが視界に入って来るのが普通で、長い竿を操り滑るように左右に移動する不思議な光景がよく見られる。

この東側に大通りをはさんで聖メアリーズ大教会（別名University Church）があり、123段の階段を上るとこのカレッジとチャペルの絶景が見える。ぜひ上ってほしいが、難点が二つ。ひとつ目は階段があまりに狭く急で、上から下りる客と下から上る人はほとんど抱き合うようにしてすれ違うということ。もうひとつは、冬は階段が凍て付き危険なので一般公開をしない日が多いことである。私もここからの市街の建物が見たくてそ

ばを通るたびに、教会関係者に尋ねた。念願かなったのは希望して2か月も経過した2月だった。

こうしたカレッジ巡りのように恵まれた環境は、私が遠くまで足を延ばした結果ではない。これらはほぼ私の通勤路の一部である。この先はキングズカレッジの隣のクレアカレッジを抜けて、リサーチセンターや大学図書館に行くのが私の常であった。

ある日いつものようにクレアカレッジの裏門を抜けると、アラブ系と思われる若い観光客が一人親しげに近寄って来た。旅行なら普通何らかの下調べをしてくるものだが、彼はいっこうに知らない。ケンブリッジでは何を見ればいいのかなどかなり分かりやすい質問をしてくる。すでに土地勘が出てきていた私は、上で述べたようなことを図に乗ってしゃべった上に、歩きながら少し案内までしてしまった。どこから来たのか聞くから日本だと言うと、別れ際に彼はお礼を言いたかったのか、とたんに日本の車が好きだと言いだした。トヨタもニッサンもミツビシもみんなすばらしいとか言った。気持ちは嬉しいが残念ながら、私はその会社のどれにも属していない。中国から来たと言ったなら、彼は何と言って褒めたんだろう。気持ちだけいただいて旅の無事を祈り、彼とはそこで別れた。

◆フラット (flat)

住居に関して、客員研究員はカレッジに所属する者もあれば、民間のフラットと契約する者もある。私の場合は後者で、ロンドンにいた5か月の間にケンブリッジに一度来て住居探しをした。ケンブリッジ大学がウェブサイトを通じて住居を紹介してくれるのだが、なかなかこちらの条件と合わない。それでも3軒ほど目星をつけて、あとは電話で大家たちと直接交渉だ。それでも見ないうちには決心がつかないので、長距離バス (coach) で2時間ほどかけケンブリッジに赴き、ある3階建のフラットを見せてもらった。住所の一部に“close”(袋小路)などという名称が付いているので、どうせ奥まったところにひっそりとあるのだろうと思っていたら、は

たしてそのとおりであった。その大家は高校教師だという40代半ばくらいの Charles Berkley 氏 ——190cmはあろうかという長身である。同業ということも幸いしてか、意気投合。そこから大学の英語学部へ直行するバスがあることもわかりその住居に即決した。実は別の大家とは話の途中で決裂していたので、正直これでホッとした。

2か月後実際住んでみると、それでもいろいろ厄介な手続きがあり、これなら、カレッジのほうがよかったかなと思ったことが何度かあった。地方税 (council tax) の支払い手続きのほかに、テレビの受信料 (TV licence)、水道、電気、インターネット契約・接続などすべて自分で手配することになってしまった。大家は家賃の徴収以外は関わってこないで、次の日から、プリペイド携帯がきれないようにと祈りながら、一つひとつ電話をしていく。相手が外国人のケースもあり、英語が訛りに訛っている。

ついでながら、アメリカでは“z”を [zi:] と発音するが、イギリスでは [zed]。私が名字を発音している時、“z”をいつもの口調で [zi:] と言ってしまった。次の週届いた水道局の支払いカードには“z”ではなく、その発音と似た“v”の文字がわりっぱに印刷してあった。はたして私は“yamavaki” (ヤマヴァキ) と命名されてしまった。水道屋にはそれで通すことにした。

住まいは結局、日本でいう1LDKに相当するもので、かの税金や電気料などを入れると月額900ポンドくらい。リーマンショックの前だったので1ポンド約200円の計算で、18万円。ケンブリッジは高いとは聞いていたが、家にいるだけでけっこうな負担になってしまった。

◆街の歴史的遺産

ケンブリッジは大学町になる前から、交易拠点として栄えていた所なので、歴史的に価値あるものも多々見られる。ケンブリッジシャー州最古の建物も見ものである。カヌート王が支配していた1025年頃の建築物とされる聖ベネディクト教会 (St Benedict's Church) の「塔」はサクソン様式で、塔の縁取りや丸みのある窓の上部が特徴といわれている。1,000年近

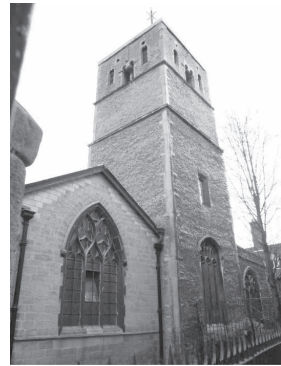
い昔を語っているのがこの塔ということになる。

おもしろいのは、一番上に丸い穴が各面2つずつあいていることである。当時は衛生状態がよくないので害虫やネズミが多く出たらしいが、これは、それを退治してくれるフクロウの住みかとなっていた穴だったということである。

市街のはずれにケンブリッジ城跡（Castle Mound）の小高い丘がある。1066年にノルマン人の征服でウィリアム一世が即位すると、2年後ここに要塞として木造の城を築いた。フランスからのこの王に最後まで抵抗をしたのが、愛国者のヘリウォード（Hereward the Wake）である。近くのイーリー（Ely, 特産のウナギ〈eel〉が語源）の村を守った英雄と讃えられ、後にロビンフッドのモデルになったともいわれている。さらにこのケンブリッジ城跡は13世紀後期に石造りの城をエドワード一世が築いた場所でもあり、歴史上重要な位置を占める。城が1842年に壊された後は丘だけが残された。

城跡はやや小高い丘になっており、市街がかなり平らなためにここから市内の一定の所までは見わたせる。しかし現在でも浸食が激しく、自転車やスケートボードの乗り入れを禁止している（This is an ancient monument. Strictly no cycling or skateboarding. という看板も画面外にある）。

市内で二番目に古い建物は、俗に「円形教会」（Round Church）といわれるものである。この形のもはイギリスでも5つしかなく、ケンブリッジのものは1130年に建てられた（ただし円錐形の屋根は19世紀のものらしい）。最初の十字軍がエルサレムの円形教会に魅せられここに建てたといわれている。サクソン様式の聖ベネディクト教会とこのノルマン様式の教会の対照は、ノルマン人の征服という史実をはさんで、イギリスの歴史そのものを物語っている。中はそれほど大きくはないが、観光客向けにケンブリッジの歴史を分かりやすく説明している掲示や映像があり、街の移り変



St Benedict's Church



Round Church



Castle Mound

わりを知る上にもってこいである。

◆英語・応用言語学リサーチセンター

(Research Centre for English and Applied Linguistics, RCEAL)

リサーチセンターの客員研究員たちは、ケンブリッジでの滞在時期や長さ
に少しずつずれがあるので、コーディネーターや秘書たちは小刻みに数
多くオリエンテーションをしている。私が到着した8月末は他に3人の研
究員が同席して、センター資料室

や学部コンピュータ室の使い方、
大学院授業出席の可否など、事細
かな説明があった。自己紹介をす
るよう促されたから、専門をひ
ととおり話した後、趣味の卓球の
話を切り出した。いつでもお相手
をする旨を伝えたら、一瞬、間が



Faculty of English

あって場を静かにさせてしまった。学問や研究の話をしている時に、趣味
の話。いわゆる「KY」だったのかもしれない。自己紹介は即、次の人にま
わされてしまった。

研究員の滞在期間は半年から1年が多く私がこの後親しくなった研究員の James は1年間、北京の大学院生 Peiqian He は6か月だった。

ケンブリッジ大学は3学期制で、私は10月初旬から始まる Michaelmas Term と1月からの Lent Term に受講することにした。取り急ぎ、合計1,000ポンドを払い込んだ。いずれも8週間の学期で、アメリカの大学のクォーター（Quarter）制の10週間と比べても、意外と短いと感じた。しかし学生は学部の授業とカレッジの個人指導などでかなり絞られていることは確かだ。

授業は大学院博士課程や特別講義に多く出た。大学院はレベルの高い濃い内容が多く、また周到に準備された立派な授業だった。教師は基本的にはパワーポイントと配布資料で、短い時間内に要領よく説明する。各授業ではその分野の参考文献のリストも入手でき今後の研究に役立つと思われる。特に文法理論の歴史的变化を扱った講義「文法の種類（Styles of Grammar）」などはこれまでの知識を整理し、更に発展させる上で有効だった。過去の主流だった文法の枠組みから、最新の理論まで少しの隙もなく学習していないとついていけない授業である。受講者数も10~15人程度、授業への取り組みはみんな真剣である。私語などする学生はいない。私もずいぶん前にアメリカの大学と大学院を卒業したが、緊張感のある同じ光景を思い出した。学部であれ大学院であれ、最高学府の授業はこうでなくてはならない。

授業が空いたときは、大学図書館（University Library）、学部図書館、センター資料室などに毎日のように行った。幸い、大学図書館はセンターのすぐそばにあり、非常に便利だった（ちなみに、センターの隣は理論物理学・宇宙学者のあのホーキング博士の研究所である）。1934年開館で赤い電話ボックス（旧式）の設計士のデザインだという。そういえばこの50メートルに近い塔は巨大な電話ボックスにも見える。

私は主に社会言語学や語用論などの文献や資料を探すことが多かったが、この図書館には古今の蔵書が揃っていて、500万冊の書籍や文書が収め

られているという。勞せずその場で手にすることができるのは、集中を切らさずに研究ができるという意味で良い環境だった。しかし本棚のスペースが無くなり、テーブルの上や出張った小棚の部分にも臨時的に本が並んでいるのには、整理上さすがに少し不安を覚えた。



University Library

大学図書館内にはデジタル資料室 (Digital Resources Area) があり、多くの学術雑誌がコンピュータの画面で読めたり、貴重な論文もダウンロードできた。帰国前の数か月はここが私のお気に入りの場所だった。

学部やセンターの図書館も、規模こそ小さいものの資料室的な役割を果たしており自由に利用ができ、言語理論から学際的な分野まで特に最近の本が参考になった。

学部内のコンピュータ室には新しいパソコンが入れてあって、日本語の読み書きもでき、夜7時まで使えるというのも便利だった。ここは学生や研究者もよく利用をしている共同研究室のひとつである。ただ静寂の中で、ひとつだけ気になったのは学生がデスクトップのキーボードを叩く音。彼らには「漢字・かな変換」など必要ないものだから、例外なく打つのがむちゃくちゃ速い。そしてその音が集まると、閉じられた空間ではけっこうな騒音になる。

とはいえ、プリンタを持って行かなかった私はこの部屋をよく利用し、銀行カードで支払えるシステムに重宝した。またロンドンでパソコンのアダプタが高熱で壊れた経験から、日本語の打てるバックアップのパソコンが必要だったので、その意味でもこの部屋は不可欠だった。

大学教員、センター秘書、コーディネーターなど大学関係者の細かい配慮で、学部は折りに触れ drinks party や lunch に招待してくれ、各国から

の研究者ともお話ができた。客員研究員はヨーロッパやアジア（特に中国）からの研究者が多く、国際語（lingua franca）としての英語の役割を身をもって再確認した次第である。中国のある研究者によると、英語学習のなかで、日本同様やはりリスニングが難しいということであった。彼らも各大学から国費で派遣されて



Professors & visiting scholars
(筆者中央上)

きている優秀な研究者であるが、自国での授業は英語が当然使われているという。この意味でも日本の大学は英語で授業のできる教員を採用しなければならないことを再認識した。クリスマスに近いある日、センターの秘書から客員研究員たちにメールがあり、飾り付けを手伝ってこないかという連絡があった。もちろん強制ではないが、駆けつけてみると顔なじみの研究者がかなり集まっていた。風船を力いっぱい膨らましている顔がおかしくてお互いに大笑いした。時間が余って、ビスケットをいただきながら、しぜんに言語の話しになった。座にいた唯一の日本人である私が突然、



Drinks party

日本語の権威にされてしまった。実は知っていそうで知らないのが自国のことばである。漢字表記や意味論の話。知ってる以上のことを口走ってしまったかもしれない。

飾り付けの手伝いはある意味「名目」で、研究員どうし交流の機会を設けたいというのが本意だった気がする。ともかく、何か

につけ数多く交流を図ってくれるのは大変ありがたかった。

多くの学生の「足」は自転車である。古い町なので狭い路地も多く、市内に広がったカレッジや大学施設、学部、図書館などへの移動には自転車最適である。時代を経て、いつのまにかエコの最先端を行っていること

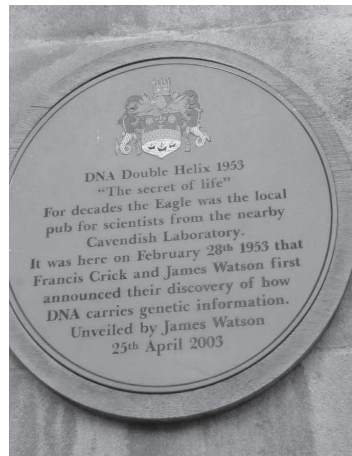
になる。客員研究員も中古の自転車を手に入れ自宅から授業のあるサイト（いわゆる「キャンパス」のことだが、古い歴史のこの大学では“Sidgwick Site”のようにこのことばを使う）へと通う人も多い。私はやや離れた所に住んでいたので主に市内の路線バスを利用したが、何か月もいれば費用的には自転車のほうがはるかに経済的である。かなりの雨の日でもフードをかぶって自転車をこぐ姿が普通である。ここはあまり雪が降らないので、冬でも自転車は使える。

ついでながら、一般に英国の冬は緯度の割には、暖流のせいであり寒いというが、私の経験ではかなり底冷えがする。ある辞書にはイギリスの高齢者は関節炎（arthritis）が多いと書いてあった。私も少しこわばった関節をさすりながら、納得した。もともとすっきりしないどんよりした天候が多く、一日の中でも天気が変わりやすい。晴れた日でも油断せずに、折りたたみ傘が重宝する。

◆パブ (pubs) と川下り (punting)

学生や観光客の楽しみかたはいろいろあるが、まずパブ (public house) に行くことであろう。ほとんどのパブは数百年の歴史を誇り、ケンブリッジには120軒ほどある。私は残念ながら酒類は嗜まないが、“pub-crawl”という言い回しは前からなじみがあった。いわゆる「はしご酒をする」という意味である。次から次へとパブを這うように歩きまわる姿がイメージされる。ちなみにアメリカでは“bar-hop”という。

ソフトドリンクや軽食だけでも社交の場となるその雰囲気が気に入ったので、ロンドンでは数か月遊びに来ていた我が娘と English breakfast を食



The Eagle:
DNA構造の発見が記されているパブ

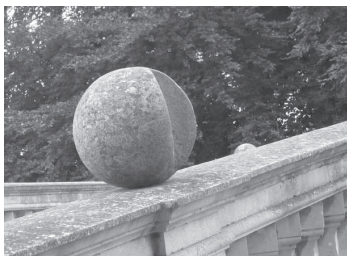
べに行ったものだった。

ケンブリッジでは1525年に建てられた「イーグル (The Eagle)」というパブがその中で最も有名である。外壁には昔の馬車 (coach) の番号も残されており、時代を感じさせる。DNAの構造を発見したクリック (Francis Crick) とワトソン (James Watson) もここの常連だったらしく、青い記念銘板 (plaque) が外壁に誇らしげに飾ってある。それには、どのようにしてDNAが遺伝子情報を伝えるのかを2人が発見し、それを最初に発表したのは1953年の2月28日で、まさにこのパブであった、とある。

この町で最もスタンダードな観光のしかたは、パント船に乗ってケム川の川下りをするのであろう。パンティングは100年ほどの歴史があるということである。パント船は平底の舟で、それを長い竿を持った案内人がうまくかじ取りをしながら、カレッジにまつわるエピソードなどを説明してくれる。自分で舟を借りてこぐこともできるので深い川ではないことが分かる。不器用にあちこちぶつけながらこいでいる女性もいたが、そのたびに起きる大きな笑いがまた楽しいひとときを象徴している。天気の良い初夏などは川下りは最高である。数か所ある乗り場付近を通ると必ず声をかけられるので、英語の練習を兼ねて少し値切ってみるといい。

ケム川は31あるカレッジのうち8校の敷地内を流れているので、40分ほどの乗船で勞せず、主な美しいカレッジが見られる。正確にはカレッジの「裏側」であるこの辺はバックス (The Backs) と呼ばれ、イギリスの川の景観としてはもっとも美しい場所のひとつとされている。1448年設立のクイーンズカレッジを出発点に、前述したキングズカレッジのチャペルが右側に見えてくると、みな様にカメラを向ける。余裕のある裏庭なので緑の芝生の広がりが見事に建物と調和している。これだけ見たとしてもケンブリッジを訪れる価値はあると納得する。

くぐる橋は9つあるが、クレア橋 (Clare Bridge) は1640年の古くに完成した。一抱えもある大きな石の球が欄干の上に14個、今にも落ちそうに一列に並んで乗っている。よく見るとそのうちのひとつが4分の1ほど欠



Clare Bridge

けている。鋭利な刃物で切り取られたように90°の角度でもって楔形のかたまりが抜け落ちている。案内人の話では、そうすることによって、安い報酬に反発した橋の設計士が抗議の意を表したということだった。

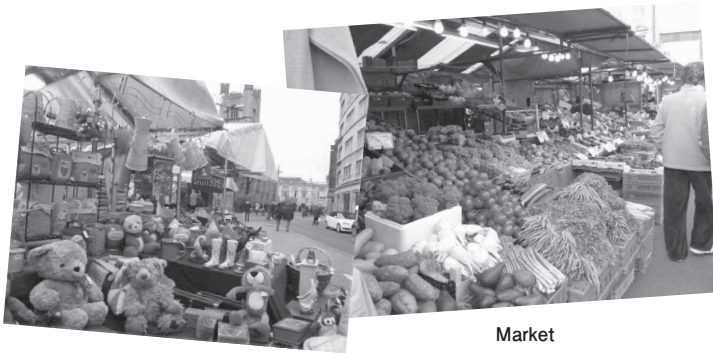
イタリアのベニスの橋に似せた「溜め息橋 (Bridge of Sighs)」はキングズカレッジの景観と人気を二分するくらいよくカメラに収められる橋である。空が青い時には壁の白さがいっそう光るように見える。ビクトリア女王はこの風景がカレッジで一番お気に入りだったということである。

旅行者のもうひとつの楽しみは、市の中心部に立つマーケットである。赤、青、黄色の縞模様のテントが何十軒と軒を並べる。季節の野菜や果物が豊かな色を見せている。私のお気に入りは秋に出る柿である。標示には“kaki”とある。握ると片手いっぱいになるほどの大きさで、橙色がつやつやしてはほんのり甘い。



Punting (Bridge of Sighs)

また、お昼にここで簡単にブラットブルスト (bratwurst) ソーセージを頬張ることもある。私の顔を見るなり「ニーハオ (你好!)」と店主が声をかけてきた。この手の誤解は海外に出て慣れてしまった。更にたて続けに中国語らしいことを言うので、いよいよ返答に困って素性を明かした。ここで簡単なお詫びがあってもおかしくはないが、この主人は意に介さない。全面、英語に切り替えてまた話してきた。ドイツ語訛りのある英語でかなり基本的なことばしか使わないが、会話を楽しもうという姿勢は好感が持



Market

てる。英語を話すときは日本人の態度もこうでなくてはいけない。

あるのは食べ物屋だけではなくTシャツ専門店や骨董品店、オリジナルの芸術品・小物などの店もある。見ているだけで、小1時間はすぐに経ってしまう。

◆グランチェスター (Grantchester)

グランチェスターはケム川（旧称：グランタ川，The River Granta）沿いにある，ケンブリッジシャー州の閑静な村である。バイロンやミルトンらの文人が思索にふけたというこの村を初めて訪れたのは10月初旬のひんやりと肌寒い日だった。同僚の渡部亮教授の案内でケンブリッジ市内からケム川沿いに二人で散策に出かけた。水量豊かな川の流れが左にあり，一面緑のじゅうたんを敷き詰めたような田園風景が続く。遠くに牛が草を食む姿も見えた。声が吸い込まれるような静寂の中，草にすれるスニーカーのかすかな足音だけが聞こえる。時折若いカップルや家族連れとすれ違おうが，ゆっくりした田舎の



The Orchard, Grantchester

ペースを楽しむかのように笑みがこぼれている。

余裕をもった足取りで50分ほど歩くと、オーチャード (The Orchard) というティーガーデンが見えてくる。ここは1897年にオープンし、地域の住民やケンブリッジの学生の憩いの場となっている。一見単なるティールームと果樹園に過ぎないように見える所だが、実は歴史に名だたる人物たちが集い、意見を交わした場所として有名だと知った。ここは小説家バージニア・ウルフ (Virginia Woolf), 経済学者ケインズ (Maynard Keynes) 数学者・哲学者バートランド・ラッセル (Bertrand Russell), 哲学者ウィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein), 小説家フォースター (E. M. Forster) など、いわゆる「グランチェスターグループ」と呼ばれる人々のお気に入りの場所だったのである。ケインズがキャンプ好きだったことや、ウィトゲンシュタインが運動の大切さをラッセルに説かれて、乗馬やカヌーをよくやっていたこともこの場所で知った。彼らはどんな話をしたのだろうかなどと、とめどもない想像をしながら軽いランチをとった。手作りのスコーンはやや規格外のかたちをしていたが、大きめで香ばしくジャムの甘さとよく合った。ゆっくり流れる語らいの時間。陽光の角度が変わるまで、しばし贅沢な時を満喫した。